千種鉄の流通と刀剣

大村拓生

はじめに

播磨国北西部で古代から砂鉄を用いた製鉄が営まれていたことにより、当研究室には「たたら製鉄研究班」がおかれ、昨年三月刊行された紀要第三号でも、文献史学・考古学双方から新たな成果が公表されている。しかし対象とされている時期は古代もしくは近世で、中世後期から近世初頭の発掘事例が皆無ということもあり、断絶がみられるのが現状である。その一方で一五世紀末に備前長船刀工勝光・宗光が千種鉄を利用したことを明示する史料もよく知られており、製鉄そのものが連続していたことは間違いない。

本稿はこの千種鉄の実像に迫ることを目的とするものだが、その方法について明確にしておきたい。千種鉄に言及した論考の多くが刀剣に特化した研究者（鑑定家）によるものである点が特筆される。そこでは現存する刀剣銘文の集成を通じて刀工の活動が明らかにされ[1]、播磨という地域に密着した研究もある[2]。本稿もその成果に依拠するものだが、問題関心が専ら美術品としての価値に重点が置かれているため、鎌倉期の刀剣こそが最高傑作で、室町期は粗製濫造という枠組みに制約されざるを得ないものとなっている。その一方で近世の刀剣書では天文ごろ（一五三二～五五）に宍粟郡千種で白鋼を吹く技術が成立したとされ、たたら製鉄史に関する研究では早くから注目されてきた[3]。

この一見矛盾したようにみえる認識を、どのように捉えるべきであろうか。本稿は文献史学の立場に立つものだが、製鉄および刀剣を対象とした研究は、わずかに講座で取り上げられるのみでほとんど皆無という状況が続いてきた[4]。ようやく近

年になって吉原弘道氏が刀剣書に関する研究をすすめているが、[5]武家故実への関心からのものである。その一方で中島圭一氏[6]は一五世紀に集約化・量産化という「生産革命」というべき現象が生じたとし、その一例として製鉄も取り上げている。

本稿はこの中島氏の視角を継承して、刀剣関連史料をもとに播磨における鉄の生産と流通について検討する。すでに先行研究で取り上げられている事例も多く屋上屋を架すことになるが、文献史学から試みられたことはなく、一定の意味を持つものと考えている。なお千種は千草と表現されることもあり、宍粟は近世史料では完粟のほうが一般的である。史料引用ではいちいち注記せず原文に従い、本文では千種・宍粟とする。

一、一四世紀までの播磨における作刀

（1）刀剣書にみえる播磨刀工

文献史料にみえる播磨における鉄関係の記録は周知の『播磨国風土記』で、讃容郡の鹿背山の四面一二の谷全てから「生レ鉄」こと、宍禾郡の柏野里敷草村・御方里金内川にも「生レ鉄」という記事がみえ、奈良県高市郡明日香村大官大寺跡出土木簡にも「讃容郡駅里鉄十連」との記載がある。[7]

さらに一二世紀成立の『梁塵秘抄』には「たつものは　海に立つ波群雀　播磨の赤穂が造れる腰刀　一夜宿世の徒名とか」という歌が収録されている。[8]ここから佐用郡から千種川を下った赤穂郡で腰刀が鍛造されていると認識が、京都周辺にあったことがわかる。当該期はすでに備前で刀工が活動し始めたことが現存刀剣から確認されるが、播磨の刀工による事例は遺されていない。

その一方で中世の刀工名を記した刀剣書にはいくつか興味深い記載が確認できる。長らく最古の刀剣書とされ、吉原弘道氏によると原本は鎌倉後期に遡るという『観智院本銘尽』[9]には、刀工家時に「埋鋒幡磨ヒサウ所有」という注記がある。この家時は享徳元年（一四五二）の奥書を有する『鍛治名字考』[10]にも「播磨国住鍛治」九名の一人として登場し、「神西郡権守ト云一条院御宇作者也」と注記される。長享二年（一四八八）筆写の『長享銘尽』[11]にも「播磨国鍛治次第」として列挙

される八名の一人としてみえ、「一条院御宇シサウノ権守ト云」と注記される。本来は「シサウ」という注記があり、誤写（ヒサウ）や誤釈（神西）による表記となり、武家系図によくある「権守」が付加されたものだと思われる。作例が確認できず家時が実在の人物であるという明証も存在しないが、宍粟郡における産鉄の存在が知られていたからこその注記とみなすことは可能ではないか。

さらに『鍛治名字考』の「播磨国住鍛治」の包吉という刀工に「神西郡小河ノ住、日本一宝」との注記がある。寛政四年（一七九二）初版の『古今銘盡合類大全』[12]にも、「古記之播磨小川包吉」の名前がみえ、貞応・貞永など鎌倉期の年号を有する小川を拠点とする一派が存在したとある。この小川について、姫路市花田町小川に比定する見解の一方で、赤穂郡に属する相生市矢野町小河に比定するものがある。[13]『梁塵秘抄』との整合性を鑑みると矢野町小河説を採るべきではないか。この小河刀工についても現存事例が全く確認されていないが、何らかの実態を有していた可能性を想定しておきたい。

（2）西遷地頭大河原氏の刀剣奉納

このような憶測を補強してくれるのが、よく知られた鎌倉後期の二つの太刀銘文である（以下、刀銘には返り点を付けない）。

A（表）秩父大菩薩
願主武蔵国秩父郡大河原入道沙弥蔵蓮同左衛門尉／丹治時基於播磨国完粟郡三方西造之
（裏）作者備前国長船住左兵衛尉／景光進士三郎景政　正中二年七月日

B（表）広峰山御剣　願主武蔵国秩父郡住大河原／左衛門尉丹治時基於播磨国完粟郡三方西造之
（裏）備前国長船住左兵衛尉景光／作者進士三郎景政　嘉暦二年己巳七月日

Aは現在は宮内庁所蔵の御物、Bは埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵の国宝で、何れも優品として知られ景光・景政奉納刀として刀剣研究者によって取り上げられてきた。[14]また奉納主体となったのが武蔵国秩父郡に出自を有する丹治を本姓とする武蔵丹党の一流である大河原氏で、西遷御家人として播磨で活動したため、武蔵・播磨双方に文書

が遺されていることから、文献史学からの研究でもこの刀剣銘文は扱われている。[15]

そこでは大河原氏と奉納者時基の子孫が称する同じく武蔵丹党出自の中村氏との関係、西遷をめぐる問題などいくつかの論点があるが、本稿の視点との関係で重要なのは、①秩父郡の在地領主の「石工・金工・鍛治等の特殊技術者集団の組織者としての属性」という特異な側面（海津）・秩父地方の製鉄文化[16]が宍粟郡への西遷と関係しているのか、②三方西と長船刀工との関係、がある。

それを考える上で留意すべきなのが、この奉納先・奉納主体・作刀場所・刀匠名・年紀という全ての情報を茎全面に記した刀剣銘が他に類例のないものであるという事実である。備前刀の注文銘を集成した事例、神社への奉納銘を集成した事例の何れをみても、[17]これに匹敵するものは確認できない。とりわけ鎌倉期の現存刀剣の多くは無銘もしくは、刀工の実名のみが記されるのが大半で、急増するのは室町期、具体的には一五世紀後半以降になって居住地・官途を明記した刀匠名、注文主などが刻印されるようになる。

銘文は注文主（願主）の意向に依ることは明白で、Aについては大河原蔵連・丹治時基（一般に父子と考えられている）が、現在の本領である三方西で、すでに活躍が知られていた備前長船刀工に作刀させて、出身地である秩父大菩薩に奉納したことを明示したかったためと考えられる。またBの奉納先である播磨広峯山に対しても三方西が明記されているのは、時基の所領であることを強調する意図があったと推測される。

そこから①の論点については、全くの偶然とは考えにくく、②についても、これらの刀剣が三方西で産出される砂鉄を原料としていた蓋然性が高いと考えられる。備前刀研究では美作・備前産出の鉄が利用されたとされ、[18]播磨産の鉄についてはほぼ考慮されていない。しかし刀剣史の小笠原信夫氏は備前における長船鍛治の台頭と当該刀剣銘との関係に着目し、「鉄素材の購入径路が専有化」と指摘している。そこまで言い切れるかは疑問だが、赤穂郡の鍛治集団が痕跡を残さない一方で、鉄素材の供給についてはむしろ播磨側が優越するようになった可能性もある。

跋文によると文明一六年（一四八四）一一月三日に山門東塔北谷の乗養坊で書かれたという刀剣書[19]（現存本は天文一六年〈一五四七〉の写本）には、「幡磨国鍛治事」の注記として「当国之金能キ間、昔備前人於テ此国ニ細々致トス鍛治也」とある。ここから備前刀工が播磨に出向き産出された鉄を用いた鍛造を行っていたという認識があったことがわかり、先の推測を補強する事例といえる。

二、技術革新と宍粟鋼のブランド化

（1）天文の技術革新認識

さらに天正七年（一五七九）の竹屋理庵編『新刊秘伝抄』第二六には以下のように記される。[20]

一、鉄は播州のしそうがねは性柔弱にして鍛疎なれども地肌濃かなり。然れども早くつかる鉄なり。備前鍛冶これを用う。これに因りて彼の国の太刀棟鉄よわし。出雲の荒鉄ぢやうのうは、性強剛なり。大和・山城の鍛冶これを用う。よく沸えて棟鉄つよく、湯走あり。

すなわち、播磨の宍粟鉄は性は柔弱だが地肌が濃やで、早く疲れる鉄で、備前鍛治がこれを利用している。そのため備前刀は鍛造の際に用いる棟鉄が弱いとされる。それに対して出雲の荒鉄は性質が真逆で大和・山城の鍛治が利用しているというのである。また続く項目で「しそうがねと云うは、刃鉄棟鉄を合せて延べる時の根つぎの鉄なり。いかにも鈍き鉄なり。延べるに随つて此の敷鉄切先まで昇るものなり。これに依て備前物など必ず先の刃やけかぬるなり」とある。日本刀は心鉄を中心に、上部を棟鉄、下部を刃鉄側面から皮鉄を夾んで鍛造するが、その際に用いるとして宍粟鉄の性質が説明されている。

ここでは備前刀と宍粟鉄が強く結びつけられているが、それが本来的なものだったかは保留が必要となる。それというのも宍粟鉄が特記されるのは戦国期に生じたとされる技術革新の結果だと思われるからである。この点について、出羽出身の刀工水心子正秀が文政四年（一八二一）に著した『剣工秘伝志』の一節を掲げておく。[21]

又天文ノ比ニ至テハ、播州完栗郡千草村ニテ延鋼トセス、打砕ヒテ白鋼ト号シ、大水・小

水・延鋼ノ代リト為ス。又石州邑知郡出羽村ニテモ、同ク打砕テ水入鋼ト号シ、大水・小水ノ代リト為シ、諸国ニ出スト云ヘリ。此事流行シテ伯州・雲州ヨリモ、播・石二州ノ如クニ吹出シ、弥々流行シテ応永後ノ鍛冶ハ刀剣ニモ是ヲ用ユル事トハ成レリ。故ニ往古ヨリ応永ノ比迄ノ刀鍛冶ハ皆自ラ銑ヲ製シテ鋼トナシ、刀剣ニ造リタル事ナレ共、近世ニ至リテハ　聞伝ヘタル人タニ稀ニシテ、其製方ヲ知タル人ハ猶以テ稀レ也。

これはたたら製鉄研究ではよく知られている記事で、かつては製鉄炉を打ち割って引き出した製品の出来から延鋼・大水・小水に分けていたが、天文年間（一五三二～五五）に播磨国宍粟郡千草村で直接白鋼が生産されるようになり、石見国邑智郡出羽村でも水入鋼が生産され、それらが流通するようになり、伯耆・出雲でも同様になった。そのため認識に齟齬があるが応永年間（一三九四～一四二八）以前の刀鍛冶は自ら製鉄を行っていたが、以後は鋼を用いるようになったという。

水心子の見解には否定的な見方もあるが、[22]その影響力は圧倒的で、刀剣研究では戦国までは鋼以前から鍛造されていたとして古刀、慶長以後は鋼から鍛造された新刀、水心子が提唱した卸し鉄から鍛造し鎌倉期古刀を目指したものを新々刀と区分されているほどである。

また近世たたら製鉄研究の基本史料である天明四年（一七八四）の識語のある『鉄山[23]必用記事』でも、第一の「諸国鉄刃鉄之事」という項で、「播州完栗ノ刃鉄名物也、ツルキニ鍛冶而切味疾ヨシ」と記した後に、「承伝フ上代ハ皆延鈒」とあり、「中古白刃鉄」になったとされる。ここでは著者下原重仲の出身地のためか伯耆が濫觴とされ、最初に記された宍粟刃鉄が浮いているが、技術革新があったという認識は同様といえる。また同書で出雲金屋子神は「播磨国志相郡今之岩鍋と云所へ、高天原より一神天降り坐す神」が白鷺に乗り移動したと伝え、宍粟郡にルーツが求められているのも技術伝搬が神話化された可能性がある。[24]あくまでも後代の見解で考古学的には実証されていないが、近世以前のある段階での技術革新によって宍粟鋼がブランド化したとみることは可能では

ないか。

（2）近世刀剣と宍粟鋼

この宍粟鋼は、寛永一五年（一六三八）の自序がある俳諧作法書『毛吹草』[25]第四に、播磨の特産品として「完粟鉄　刃金　鋤　鍬」が挙げられ、正徳三年（一七一三）の序をもつ『和漢三才図会』[26]巻七七の「播磨国土産」でも「鋼鉄類　鍬鉏（完粟）」と継承されている。また同書巻五九には「熟鉄は雲州・播州より出るものを上となす」・「生鋼は播州の千草より出づる者を勝れると為す」などとあり、千草から産出される生鋼が高く評価されていたことがわかる。

この生鋼は鍛造に用いるものとされ、刀剣銘からもこれを確認することができる。管見の限り年紀が記されたもっとも古い刀剣銘は「菊紋　近江守源久道／貞享元年（一六八四）十月朔日／以完粟上鉄無垢造之」と刻印された刀で[27]、久道は京都で五鍛治と称された著名な刀工だが、宍粟鋼の利用が特記されている。同じく五鍛治の一人である丹波守吉道子息の丹後守兼道は大坂に移住したが「丹後守兼道／菊紋一　生鍛以完粟鉄造之」[28]という銘の短刀を鍛造している。

この大坂で活躍した多々良長幸作には「摂州大坂住長幸／播州完粟以鉄作之／貞享二年八月日」[29]銘の刀・「長幸於摂津国大坂以千草鉄鍛之／貞享三年二月日／二之胴土段越至平地　斬者二股孫助」[30]銘の脇差・「摂刄大坂住長幸／貞享三年丙寅八月日／以播磨国完粟鋼鉄作之」[31]銘の刀など素材として利用したことを明示したものが現存する。また同じく大坂新刀の刀工で元禄期に活躍した源忠行作の脇指銘にも「摂津守源忠行／以志相鉄作之」[32]という事例が確認できる。

このように大坂刀工の作品に素材が明記されている背景として、貞享三年二月日の脇指解説で、鉄問屋の存在が指摘されている。宍粟郡山崎町で寛永一〇年（一六三三）頃に平瀬清信が創業した千草屋は郡内諸鉄山の請負を行うとともに、三男道閑が大坂で鉄問屋千草屋を出店して生産・販売の一貫経営を行ったという[33]。「平瀬氏略系図」によると、長男重正は寛永一九年（一六四二）に三二歳で没し、元禄一三年（一七〇〇）年に没した

道閑の大坂出店は一七世紀半ば以降と考えられるが、大坂新刀の隆盛[34]に大きく貢献したものと思われる。

この平瀬清信のひ孫に当たる四代目鉄山師信古は、正徳二年（一七一二）地元の山崎八幡宮に「播刕宍粟郡鎮座／奉納山崎八幡宮　願主平瀬氏信古／正徳二壬辰年五月吉日／高柳加賀守藤原貞広行年七十有二同子／国継相具以宍粟鉄作之」銘の刀を奉納している。この高柳加賀守は大坂ではなく越前下坂派の刀工で、「高柳加賀守藤原貞広行年七十有余／岡（ママ）子国継相／南蛮宍粟出羽三色以鉄／正徳五乙未年八月吉日[35]」銘の脇指も遺している。これは宍粟鋼だけでなく、南蛮鉄・出羽鉄の三種の鉄で鍛造した変わり種になる。印象になるが素材を明記した刀剣銘としては南蛮がもっとも目立ち、国内では宍粟・千種が最多のようにみえる[36]。「賀州住兼若／播州以鉄造之[37]」と加賀で活躍した兼若作の刀にも宍粟鋼を用いたらしい銘が遺されており、その拡がりが知られる。

また姫路では近世初期から刀工が活躍していたが、延宝期（一六七三～八一）に活躍した宗貞の「播州住四郎右衛門尉宗貞完粟鉄吟作之[38]」、元禄七年（一六九四）の脇指銘「（表）右　藤原宗栄／元禄七甲戌年二月日（裏）播州完粟千種丸一英鉄錬鍛作[39]」などやはり宍粟鋼を用いたことを明示したものが確認できる。姫路刀工活躍の要因の一つになったと想定される。

もっとも『鉄山必用記事』第七には、「播州宍粟郡釼之義通号無レ之候、右鉄山師之義は、右郡之内千草村と申所より鉄山始候に付、右釼之義通号千草釼と唱弘申候、至而上釼に而当時は出来不レ申候得共、今に而も上釼は外国より出候得共、千草釼と唱売買いたし候」とある。これは著者下原重仲が白刃金の濫觴とする伯耆俣野刃金の解説に、大坂で鉄商売を営む中川氏が書添として記したものである。すなわち宍粟郡の釼は通称名がなく、鉄山師が千草村から鉄山が始まったとので千草釼と呼称していた。大変上等なので当時は生産されていなかったが、上釼は他国産出でも千草釼として売買されていたというのである。

一八世紀半ばに山崎千草屋が経営破綻して鉄山から撤退するのは事実であるが、その後も宍粟郡

で製鉄が継続していたことは、紀要第三号所収の笠井今日子論文でより一層明らかになっている。そのため同書底本が書写された享和三年（一八〇三）ごろの状況をどれだけ反映しているかは不明だが、少なくとも千草鈡のブランド力は認めてよいだろう。「（表）於播州千草武州住／広重作（裏）天保六年八月吉日（棟）為川合左衛尉[40]」は、天保六年（一八三五）段階で、武蔵刀工がわざわざ作刀のため訪れていたことを示している。あるいは良質の鋼が入手できなかったためかもしれないが、希求されていたことは間違いなかろう。

三、千種鉄の成立と戦国期の鉄製品

（1）千種鉄の成立

前述のように刀剣書で宍粟鋼が明示されるのは、前述の『新刊秘伝抄』で、「しそう金」という記載を含む「別本能阿弥本銘尽[41]」も底本は近世末期の写本で、原本の成立も一六世紀になる。それに対して、以下に示す『蔭涼軒日録』長享二年（一四八八）八月二二日条の一節は、周知のものだがそれを遡るものとして重要である。

季材帰、三条与三郎話云、一昨日長船勝光・宗光一党、自備前上洛、凡六十員、千草鉄廿駄、人数百人許有之、蓋依鈎之御所尊名、自浦上方召上之云々、

備前長船の刀工勝光・宗光は六郎左衛門尉祐光を父とする兄弟で、その作刀活動について刀剣研究者の先行研究[42]に依り整理しておく。勝光は永享七年（一四三五）生まれ・宗光が永享九年生まれで、勝光作で年紀のもっとも古いものが文明元年（一四六九）八月、宗光が文明二年八月になる。文明一四年八月三日銘の赤松政則が宗光のために鍛造した刀剣が現存し、政則の坂本での鍛造を指導したのが宗光だったことがわかる。文明一五年八月に山名政豊が播磨に侵攻し赤松方・山名方の全面対決が始まると、一一月の福岡城の攻防戦で、勝光・宗光は赤松方として新田・香々登の野伏を率いて戦ったが敗れ長船も放火され、数百人が討ち死にしたという。永禄元年（一五五八）成立とされる「備前文明乱記[43]」の記述ではあるが、六〇人という集団で上洛していることからも、多数の

従者を引き連れていたことがわかる。

文明一六年二月の作刀は赤松方が奪回した長船と考えられているが、同年八月・一七年八月には阿波守護細川氏が分郡支配[44]する備前児島での作刀が確認され、この時期から合作銘が目立つようになるという。文明一八年二月・八月の作刀は長船とされるが、続く一一月から翌一九年二月にかけて備中草壁での作刀五口が現存する。これについて小山金波氏は、草壁荘を領有する備中守護代庄元資との和平がなった赤松政則からの親善使節と評価している。同じく文明一九年二月には帰路なのか児島での作刀があり、その後は長船に戻り作刀を続けたと考えられている。

そして長享二年八月の上洛となり、『蔭涼軒日録』九月二一日条によると、亀泉集証が近江鈎の義尚陣を訪れた際に、御対面所で義尚自らが「勝光・宗光鍛冶」を飽くことなく見学したという。「御陣」と明記されたものが五口現存しており、[45]表に素剣の彫物が施されるという特徴がある。小山氏はこれを赤松氏の播磨・備前・美作三国回復を主導した浦上則宗が、それを慶祝し天下に知らせるために意図したと評価している。

興味深い指摘だが、迎えた義尚側にとって全く受動的なものだったのだろうか。この六角氏征討のための鈎の陣については、将軍権威の発露を意図したものとして評価されている。[46]室町殿には源義家以来の相伝という由緒をもつ鎧を安置する「御小袖の間」という空間があり、そこには重代の太刀も納められていたが、義尚の鈎の陣にも帯同されていた。[47]相伝の鎧・刀は当然のこと、特別な装飾を施した作刀もその一環として評価すべきではないか。三条西実隆は翌長享三年七月に家領の摂津国富松荘代官である細川政元被官富田某に、贈答の返礼として「去年於二鈎御陣一拝領[48]」の太刀一腰を送っている。陣中見舞の際に下賜されたものと思われるが、これがあっさり手放されているのは、三月に陣中で義尚が病死したことで憚る必要がなかったためだろう。

義尚は実隆のような公家衆だけでなく、再強化をはかった奉公衆・帯同した大名などにも刀剣を下賜していたはずで、主従関係の強化を意図したものと考えられる。同時期に赤松政則は自ら作刀

して、家臣にそれを下賜しており、義尚が見学したのも単なる興味のみではなかっただろう。

その一方で、ここに長船鍛冶とともに千種鉄が明記されていることはどう理解すべきなのだろうか。これも則宗のアピールとみることも可能だが、この情報が三条与三郎なる人物によってもたらされていることに注目すべきだと考えられる。従来の研究で等閑視されているが、三条から連想されるのは室町期に活躍した京刀鍛冶三条流で、与三郎という通称名は不明だが代々吉則を名乗っていた人物に比定するのが妥当だろう。与三郎がわざわざ固有名を挙げているのは、刀剣原料としての評判を認識していたからで、長船鍛治とセットでとらえていたと考えられる。

先に行動を紹介したように、長船鍛治は原料鉄を帯同して移動しながら作刀していた。『剣工秘伝志』が述べるようにそれ以前の刀工が製鉄から実施していたかは不明だが、この段階で両者が分離していたのは明白である。天文とされる白鋼の成立が室町期まで遡る可能性も充分考えられるだろう。北田正弘氏が「備州長船勝光」銘の刀を科学分析したところ、「心鉄と刃鉄とは異なる鉱石から製錬された素材」で、「刀匠が素材を選んで使った」とされる[49]。発掘調査事例がなくあくまでも推測に過ぎないが、同名のブランドとして近世まで継続していることは、その連続性を示唆している。

それを傍証するのが、「(表)作州宗光(裏)於播州千草作之／長享二年八月日)」[50]・「備前国住人是光播州佐用郡作之／明応四年乙卯十二月日主資則」[51]といった銘である。美作刀工宗光(長船の宗光とは別人)・備前刀工是光が別の場所で作刀したことが明示されているが、それ以外の情報はない。現地の武家との関係で解釈する余地は残されているが、むしろ鉄素材を求めたことによるとみるべきではないか。ほぼ同時期のものであり、この一五世紀末に千種鉄が刀剣素材として優越性を評価されていた証左と考えておきたい。

(2) 野里鍋と美濃刀工の進出

一方ほぼ同時期に播磨の特産品として登場するのが野里鍋である。管見の限り初見は『蔭涼軒日

録』文明一八年（一四八六）二月二七日条で、赤松被官である小寺勘解由左衛門尉の使者出井新五郎が「杉原十帖・野里五ヶ」を手土産に訪れたという記事で、同じく特産品である杉原紙とともに、播磨からの土産として頻出するようになる。播磨鍋は一般に薄手で熱を伝えるのが早い銅製の鍋を指すが[52]、鉄製の鍋も存在し、『鉄山必用記事』は金屋子神伝承から「鍋の濫觴は播磨」とする。

慶長七年（一六〇二）八月七日「野里村売場法度案[53]」によると「かんなべ幷なべ、鍛治屋うち物」が扱われており、「かんなべ」を「酒の燗をするのに用いる鍋。多くは銅製[54]」とすると、鍋は鉄鍋となり、それが誤りだったとしても鍛治屋で打たれた鋤・鍬などの農具は当然鉄製だった。他に豊臣期に野里村芥田家は「唐入之御用大鉄炮[55]」・「石火矢[56]」の調進も命じられている。これも銅製と考えられ、鉄炮も清浄な軟鋼が必要で初期の鉄炮はもっぱら輸入鉄に頼っていたとされるが[57]、例外として備前長船鍛治の作と推定されていものも現存する[58]。また鉄炮生産で知られる近江国友は一般に出雲の鉄を用いていたようだが、安永七年（一七七八）生誕の国友藤兵衛は「鉄、雲・播磨ヨリ出ルヲ上トス」・「剱、播磨ノ宍粟郡ヨリ出ルモノヲ最上トス、千種村ニテ出ル千種トモユウ」と、当時の評価の反映か、千種鉄を特記している[59]。

さらに芥田善五郎宛の元亀三年（一五七二）一二月二五日「善五郎前出入算用状[60]」には、七石六斗の「公事銭・地子銭、たゝら前共」が、発給者の小寺職隆からの賦課の一つにあり、控除分の中には三石の「御新造なへ代」が含まれている。たたらは鋳物全般に用いられるため、製鉄に限定できるわけではないが興味深い記述である。『鉄山必用記事』第六によると、鞴子皮には播磨の狸がもっとも適しており、高値で取引されていたという。柄を前後することで常時強力な風を送ることができる風分庫・板を組んで桟で一枚にした踏鞴である板鞴が室町期に成立したとされ[61]、あるいは白鋼生産のための技術革新の一つに鞴の改良が含まれていたのかもしれない。

このように千種鉄がみえるのとほぼ同時期に野里鍋が播磨の特産品となり、何れも近世に連続している。さらに宍粟郡にある伊和神社の永禄五年

（一五六二）の神殿普請に関わる文書には「坂元釘」がみえる。[62] これを室町期に播磨一国の政治的中心にあった坂元とみることができ、野里とあわせて鉄の流通ルートが成立していたことがわかる。すでに小山金波氏[63]は「宍粟千種鉄の鋳鉄は野里、鋼は長船という流通機構が成立していたのではないか」とするが、その背景には一五世紀に生じた技術革新によって、鉄素材が量産されるようになったことが考えられるのではないか。室町期は明への輸出品としても刀剣があったように、大量生産されたことは疑いえない。刀剣史では否定的に評価されがちだが、逆に量産の必要性に迫られたことで生産体制の革新につながった可能性も想定すべきではないか。

また近世新刀の多くに影響を与えたとされる美濃刀工が播磨三木郡で活躍していたことも注目される。「濃州住兼国作／天文廿一年二月日／於播州三木淡河住村上源五郎盛定打虎也」[64]・「濃州住兼国／於播州三木郡為間嶋左馬允作之」[65]は、兼国が三木郡に出向いて作刀したものである。美濃国関では室町期から刀工が活躍したことが知られるが、京の贈答品として登場するのは「せキカミソリ」[66]・「不破関庇板・小刀」[67]で、専ら剃刀・小刀などが中心である。これは関では鉄素材の性質に応じて多様な鍛冶製品が製作されていたことを示すものである。その際の原料鉄の実像は不明だが、三木郡での作刀の目的の一つに千種鉄があったと考えられ、有馬街道にも流通していたのだろう。

むすびにかえて

断片的な史料から憶測を重ねてきた上に、従来の研究を祖述した点も少なくないが、『播磨国風土記』にみえる播磨北西部の製鉄が、刀剣素材として連綿と利用され、近世には千種鉄・宍粟鋼として高く評価されるにいたったこと、その過程で一五世紀に技術革新が存在した蓋然性が高いこと、戦国期には素材の質に応じて流通し、刀剣・鉄鍋など多様な製品に加工されていたことが、おぼろげながら浮かび上がってきたのではないか。

刀剣史では慶長以降を新刀、それ以前を古刀と明確に区分しており、本稿の結論とは対応してい

ない。様式的な面で異論を唱える能力は全く持ち合わせておらず、またほとんどの刀剣書は原本で確認することができず翻刻に依拠している。その点で根本的な欠陥を抱えたものになっており、全て今後の課題とせざるを得ないが、ひとまず中間的な結論を提示して稿を閉じたい。

（1）刀剣研究者による代表的著作に、『日本刀全集』全九巻（徳間書店、一九六六～六八年）・『日本刀講座新版』全一〇巻（雄山閣出版、一九六六～七〇年）などの講座、川口陟『定本日本刀剣全史』全八巻（歴史図書社、一九七二～七三年）・小笠原信夫『日本刀の歴史と鑑賞』（講談社、一九八九年）といった通史、福永酔剣『日本刀大百科事典』全五巻（雄山閣出版、一九九三年）・得能一男『日本刀事典』（光芸出版、二〇〇三年）・同『刀剣書事典』（宮帯出版社、二〇一六年）などの事典類、石井昌国編・本間薫山校閲『日本刀銘鑑』（雄山閣出版、一九七九年第三版）・得能一男『刀工大鑑』（光芸出版、二〇一三年）があり、本稿でも参照した。

（2）小山金波『赤松政則』（日本美術刀剣保存協会姫路支部、一九七七年）が到達。

（3）俵國一『日本刀の科学的研究』（日立評論社、一九五三年）、宇野正瑛「千草鉄と備前長船鍛治ー中世千草鉄研究試論ー」（たたら研究会編『日本製鉄史論』一九七〇年）、鈴木卓夫『たたら製鉄と日本刀の科学』（雄山閣出版、一九九〇年）・『作刀の伝統技法』（オーム社再発行、一九九四年初版）、鳥羽弘毅『たたらと村ー千草鉄とその周辺ー』（千種町教育委員会、一九九七年）、天田昭次『鉄と日本刀』（慶友社、二〇〇四年）、北田正弘『日本刀の材料科学』（雄山閣、二〇一七年）。

（4）仲村研「中世の大工・刀工・鋳物師と技術」（『技術の社会史』一、有斐閣、一九八二年）、網野善彦「鉄器の生産と流通」（『講座・日本技術の社会史』五、日本評論社、一九八三年）、黒田日出男「戦国・織豊期の技術と経済発展」（『講座日本歴史』四、東京大学出版会、一九八五年）、藤井譲治「一六・一七世紀の生産・技術革命」（『日本史講座』五、二〇〇四年、東京大学出版会）。

（5）吉原弘道「『銘尽（龍造寺本）』から見える中世刀剣書の成立とその受容」（『古文書研究』八四、二〇一七年）など。

（6）「十五世紀生産革命論序説」（『中世東アジアにおける技術の交流と移転ーモデル、人、技術』科研報告書、二〇一〇年）・「十五世紀生産革命論再論」（『国立歴史民俗博物館研究報告』二一〇、二〇一八年）。

（7）最新の研究は、田路正幸「播磨国宍粟郡における製鉄遺跡」・村上泰樹「播磨北西部の古代鉄生産研究

の現状と幾つかの視点」（何れも『ひょうご歴史研究室紀要』三、二〇一八年、に所収）。

（8）新日本古典文学大系本、巻二、四八〇。

（9）「銘尽」（国立国会図書館デジタルWA1―4）。吉原弘道「重要文化財『銘尽（観智院本）』の復元とその性格―中世刀剣書の祖型をめぐって―」（『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』一、二〇一一年）で、錯簡が復元されている。なお吉原註（5）論文は、応永三〇年（一四二三）の奥書を有する観智院本より、原本としてはより古い観応二年（一三五一）一二月直後の筆写とされる龍造寺本を紹介する。

（10）『天理図書館善本叢書和書之部七二―一古道集』所収。

（11）本間薫山「長享銘尽抄（六）」（『刀剣美術』二六七、一九七九年）。

（12）国文学研究資料館一般200000872デジタル219コマ。

（13）風水渙樓主人「刀匠地理考（七）」（『刀剣と歴史』二〇五、一九二八年）、近藤生「目利の手引（古刀之部）（三）」（『刀剣と歴史』二一〇、一九二八年）。

（14）三枝啓助「景光、景政合作太刀に見る添銘並びに勝光太刀」（『刀剣美術』七八、一九六二年）、小山金波「播磨丹党と備前・美作鍛治―特に広峯山御剣の造進経緯について―」（『刀剣美術』一五六・一五七、一九七〇年）、同「景光・景政の奉納者大河原丹治時基」（『刀剣美術』三三四、一九八四年）、小笠原信夫「備前長船鍛治長光の研究」（『東京国立博物館紀要』一五、一九八〇年）、辻本直男「景光、景政合作の奉納刀」（『備前刀研究』一、一九九〇年）。

（15）海津一朗「東国における郡鎮守と郡内在地領主群―鎌倉末期秩父地方の郷々地頭『一揆状況』―」（岡田清一編『河越氏の研究』名著出版、二〇〇三年、一九八三年初出に追記）・根ヶ山泰史「丹党中村氏・大河原氏西遷の基礎的考察」（『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』一〇、二〇一六年）・三枝暁子「武蔵国中村氏の神領支配と西遷」（大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会―「ムラの戸籍簿」の可能性』思文閣出版、二〇一八年）。

（16）近江紀夫「武州入間・秩父地方にみる製鉄文化と歴史（その一）―武蔵七党・丹党―」（『刀剣と歴史』五九七、一九九四年）。

（17）川口陟前掲『定本日本刀剣全史四』第七章「刀剣上より見たる信仰」、馬場一弥「注文銘について（一）―備前刀を中心にして―」（『備前刀研究』二、一九九一年）。

（18）臼井洋輔「岡山県の古代製鉄と刀剣」（『刀剣美術』三三七、一九八五年）、『長船町史刀剣編通史』（二〇〇〇年、臼井執筆分）。

（19）間宮光治「『文明十六年、佐々木氏延暦寺本銘尽』解題」（『刀剣美術』三一七、一九八三年）。

（20）本間薫山「新刊秘伝抄（十五）」（『刀剣美術』二〇六、一九七四年）。

（21）国立国会図書館デジタル特1000―5、刊本は黒江二

郎編『水心子正秀とその一門』（雄山閣出版、一九七九年）二一一頁。
(22) 天田昭次前掲『鉄と日本人』。松田次泰『名刀に挑む』（ＰＨＰ新書、二〇一七年）は現代の玉鋼からでも鎌倉期の刀は再現できるとする。
(23) テキストは『日本庶民生活史料集成』一〇（三一書房、一九七〇年）所収本に依り、『鉄山秘書』（日本鉱業史料集第二期近世篇①・②、一九八二年）の写真版を参照した。
(24) 金屋子神縁起については、目次謙一「金屋子神縁起史料解題」（鉄の道文化圏推進協議会編『金屋子神信仰の基礎的研究』岩田書院、二〇〇四年）が宍粟を含まない伝本も含めて整理されている。
(25) 岩波文庫版。
(26)『日本庶民生活史料集成』二八（三一書房、一九八〇年）所収。
(27) 珍刀押形集三三八（『刀剣と歴史』四六七、一九七二年）。
(28) 珍刀押形集五九七（『刀剣と歴史』四八五、一九七五年）。
(29) 珍刀押形集三三七（『刀剣と歴史』四六七、一九七二年）。
(30)『第三十九回重要刀剣図譜』日本美術刀剣保存協会、一九九三年。
(31)『刀剣銘字大鑑』七、雄山閣出版、一九八三年。
(32) 鈴木卓夫「宍粟鉄による作刀資料の紹介」（『刀剣美術』四一三、一九九一年）。
(33) 鳥羽弘毅前掲『たたらと村』。以下、平瀬氏に関わる記述は同書に依る。
(34)『大阪新刀を讃える』（中宮刀剣研究所、一九五九年）。
(35)『刀剣美術』別冊Ⅲ貴重刀剣認定目録昭和三四～三五年度（一九六四年）、横浜支部須藤一郎氏所蔵。
(36) その他に伯耆印賀鋼を明示した刀剣もあった。福永酔剣「添え銘の話（下）」（『刀剣と歴史』四六七、一九七二年）。
(37)『刀剣美術』三八、一九五六年。浅谷利吉氏蔵。
(38) 辻本真幸『刀銘集覧』一（北斗書房、二〇一二年）二八二頁。
(39) 龍野市立歴史文化資料館『日本名刀と播磨の刀』（二〇〇二年）二四。ただし「錬」は「練」と翻刻され、写真で訂正。
(40)『刀剣と歴史』五五三、一九八六年。
(41) 本間薫山「別本能阿弥本銘尽抜粋」（『刀剣美術』一六五、一九七〇年）。
(42) 小笠原信夫「備前長船鍛治右京亮勝光・左京進宗光の性格」（『ＭＵＳＥＵＭ』二三八、一九七一年）・小山金波前掲『赤松政則』・横田孝雄「駐槌から見た勝光・宗光の動向」（『刀剣美術』四八九、一九九七年）。
(43)『続群書類従』二三下所収。
(44) 古野貢『中世後期細川氏の権力構造』（吉川弘文館、

二〇〇八年）も参照。
(45) 横田論文で削り取られたとする一口も含む四口が示され、栗東歴史民俗博物館『鈎の陣とその時代』（二〇〇〇年）で一口追加されている。
(46) 設楽薫「足利義尚政権考―近江在陣中における『評定衆』の成立を通して―」（『史学雑誌』九八―二、一九八九年）。最新の整理に石原比伊呂「足利義尚―独り立ちへの苦悶」（榎原雅治・清水克行編『室町幕府将軍列伝』戎光祥出版、二〇一七年）がある。
(47) 鈴木彰「足利将軍家重代の太刀」（『平家物語の展開と中世社会』汲古書院、二〇〇六年）。小笠原信夫「室町時代の刀剣の様相」（『MUSEUM』四六三、一九八九年）も武家儀礼における江戸時代の刀剣の慣習が室町時代に生まれ発展したとする。
(48)『実隆公記』長享三年七月三日・四日条。
(49) 前掲『日本刀の材料科学』一三九頁。
(50) 津山市教育委員会『美作の刀工たち』一九九八年。
(51)『刀剣美術』四八号別冊　貴重刀剣・小道具認定目録昭和三一年度分（一九五七年）、斎藤忠明氏蔵。
(52)「はりまなべ」（『日本国語大辞典第二版』ジャパナレッジ版）。
(53) 芥田家文書二八（六）（『姫路市史史料編中世二』）。以下、芥田家文書は同書による。
(54)「かんなべ」（前掲『日本国語大辞典第二版』）。
(55) 芥田家文書一三（一八）。
(56) 芥田家文書一三（一九）。
(57) 佐々木稔編『火縄銃の伝来と技術』吉川弘文館、二〇〇三年。
(58) 国立歴史民俗博物館編『歴史のなかの鉄炮伝来』（二〇〇六年）八六。
(59) 湯次行孝『国友鉄砲の歴史』（サンライズ出版、一九九六年）。
(60) 芥田家文書一一（七）。
(61) 今井泰男「『鞴』論考」（山崎俊雄・前田清志編『日本の産業遺産Ⅰ―産業考古学研究』玉川大学出版部、二〇〇〇年新装版、初版は一九八六年）。
(62) 永禄五年一二月一六日「神殿普請入目注文」（『兵庫県史史料編中世三』伊和神社文書一四八）。同文書には動員された鍛冶の在所として、宍粟郡内の染河内・与位などとともに三方がみえるのも興味深い。
(63) 前掲『赤松政則』八四頁。
(64)『刀剣美術』七〇（一九六一年）、佐藤満夫氏蔵。
(65)『刀剣美術』別冊Ⅲ貴重刀剣認定目録昭和三四～三五年度（一九六四年）、宇都宮支部秋元章男氏蔵。
(66)『教言卿記』応永一四年九月一二日条。
(67)『実隆卿記』文明一五年一二月六日条。